

淀川右岸の河川敷を自転車で走っている、5,6年前にはよくここを走っていたが、最近は無沙汰だ。もうあんなところまで自転車で、「ちょっと走りに行こうか」という気力体力が衰えてきたのかな。

2月のこえを聞くと、展覧会がもうすぐだ、まもなくだ、といささか慌て、緊張する。いつも言っていることだけど、この緊張がいい、気持ちが締まって、ぴりり、絵が描ける、いい色が、いい線が画面をおどる。

画廊にはがきをと思いつつ日が過ぎていた。電車にしようか、自転車かと迷い、自転車を選んだ。先日来の淀川の話が頭にあり、「ええい ついでだ つづきだ」カメラとICレコーダー、水とパンをザックに入れた。

天気予報は晴れといていた、降水確率は20%といていたが、ぽつりぽつり小さい水滴の雨が降ってきた、空は晴れているが、ぽつりは止まらない。これぐらいでは濡れないと思いつつ、寒い、風もある、気温が低い。

今日の空はいい感じ、雲の間に青空が見える、太陽も見える、白い雲が少し暴れているのか、黒い影もみえる。雲ひとつない青空、ただ青いだけ、山に登ってまっさおな空、これはこれでいい。山の風景が、岩が土が、森が樹々が、雪の白さが、青い空に溶け込む。によきによきの白い雲、これもいい、激しい雲、ぼつとした雲、まだらな雲、悪くないねえ。青空が見えて白い雲があって、その白い裏っかわに黒い影がある、三つの色が交錯する、これも素晴らしい。今日はみつどもえの空模様、西日に向かって走っている。

橋がいくつかかかっている、「そらあ オレは 鳥飼大橋だねえ あの 木造の ペケペケの橋だねえ」その木造橋が台風で流れ、鉄のペケペケの橋を作っていたのを覚えている。下から真っ赤に焼けた鉄の鋏を投げた、上ではメガホンのようなもので受け取っていた。今は鳥飼大橋も近代的な橋。おお赤川鉄橋に、コンテナを積んだ貨車がゴトンゴトン、まだ貨物も走っているんだね。赤川鉄橋も歩けなくなった。

まだ、ホームレスのおっさんたちのブルーシート小屋がある、まだあるのだ、色はブルーじゃなく、目立たない色のシートだ。猫がうろうろごろにゃんとひっくり返っている。猫はおっさんたちと同じ布団に寝て、それは幸せだろうね。

長良橋をくぐってから土手の上で上がろう、そうすれば目的地までスムーズにいけそうかな、という考えが間違っていた。どンドン車が走る車道が横たわっている、ここは横切れない。ええいいいか、無理して車道を自転車で走る、狭い道にスピードの出ている車が横をすり抜けていく、クワバラくわばら、なんとか通り過ぎた。

無事、目的地の画廊に着き、はがきを300枚渡した。画廊は不在で、ビルの上の方にお預けをした。さあ、どの道を帰ろうか、車道を通って帰ろうか、とも思ったが、やはり河川敷を選んだ。

江口橋、そうだ先日来の江口の里、子供のころに自転車でやってきた江口は、どこかな、と土手をあがってみた。少し自転車を走らせたが、どうもよくわからない。子供のころは土手の上をまっすぐ走れば、目的地の江口橋があったはず、江口橋とはどこの橋、どの川にかかっている橋。土手じゃなく河川敷を走ると、まっすぐ淀川なんだが・・・不思議に思い帰って地図を見みた。あの神崎川は土手の下をくぐって、安威川と合流していたのだ、最近まで二俣になっていたのでは。安威川はこの合流地点で、終わっていたのだ、知らなかった、あらためて知った、がははである。いつも電車の中から見ていた川は何だったのかな。江口橋は淀川の土手から少し離れたところに、神崎川の上にあったが、子供のころに来た映画館の場所はまったくわからない。

山極寿一著<家族進化論> 当ブログ、少し前の、オランウータンの先生が、「山極先生のような本を書きたい」といっておられた。今回は、同じ書架にあった、「ゴリラ」を探したが、検索すると貸出中だったので、同じ著者の本を借りてきた。オランウータンの先生が推薦するだけあって、話が面白い。

現生の霊長類の体格の性差は社会構造と見事に一致している。単独で生活する種や、オスとメス一対のペアで暮らす種は性差がほとんどない。ペアより大きな集団で暮らす種はオスがメスより体格が大きい。とくに一頭のオスが複数のメスを囲ってハレム型の集団をつくる種は、オスがメスより格段と大きいことが多い。ハレム型のゴリラは 1.7 倍。チンパンジーは 1.2 倍、離合集散性の高い、乱交的な交尾関係を結ぶ傾向がある。人は、1.4 倍。人類の祖先はゴリラのようなハレム型の集団で暮らしていたが、しだいにペアで夫婦生活を営むようになり、性差が縮まったという考えである。

チンパンジーのほうがゴリラより、我々ヒトに近縁である。これは反対だと思っていた。DNA においてゴリラと 1.4%、チンパンジーと 1.2%しか違わない。

ゴリラのメスは、排卵の前の二日間だけ発情し、オスを誘って交尾する。チンパンジーは排卵前に発情し、その期間に性皮を腫らして交尾をするという特徴を持っている。人は周期性をもたず、周年、性交渉を結ぶことができる。オランウータンはアフリカにすむゴリラやチンパンジーのつぎに人間に近縁である。オランウータンのメスは人と同様にまったく発情徴候を示さない。オスはメスに交尾を強要し交尾する。オスもメスも単独生活を送っている。体格の性差は 2 倍。

日本の霊長類学の発想：人間以外の霊長類の社会から人間社会の由来を探求しようという霊長類学が日本に生まれたのは、二つの理由がある。一つは欧米のように人間と動物の間に明確な境界を設けるキリスト教と違い、<略>動物と人間の連続性を説く進化論が比較的抵抗なく受け入れられた。<略>日本人の宗教観からすれば、人間がほかの動物と祖先を共有するという考えはとんでもない発想ではなかった。それともう一つ、日本には土着の二ホンザルが約 50 万年前から生息していた。

ダーウィンの進化論に疑義を唱えた今西錦司は、人間の社会を特別視せず、動物の社会から人間社会が成立する条件を論じた。

かつて、DNA の話、生物の設計図、と騒がれ始め、まもなく解明できる、というようなニュースが流れていたのをかすかに聞いたような気がする。ヒトとミミズの DNA がちょっとしか違わなかった、これは驚くべきことだ、というようなニュースも流れていた。地球上のあらゆる生物、それこそ、ヒトも含めて、動物も昆虫も、草も木も、ばい菌も藻も、最初の最初はひとつの生き物だった、という話も聞いた。この話を聞いて、「あ そう」と素直に納得した。

霊長類というが、霊長、とは何なのだ、と調べた。英語で：prime 最高位。つまり生物の中で最高位のもの、ヒトが生物のなかの最高位にある。こういう考え方は、ヨーロッパ人の高慢なとらえ方か。それとも、オレもいかな、「オレは人間だよ サルと一緒にされては・・・」キリスト教では、ヒトは神が造ったもの、これも一神教の歪んだところかな、今でも一部の信者はそう信じているのかな。

アフリカで発掘されているヒトの祖先、100 万年前とか 500 万年前とか聞く。彼らがヒトなのか、ゴリラやチンパンジーとそうは変わらなかったのかはわからない。5 万年前 10 万年前のホモサピエンスやネアンデルタール人はどうもヒトのようだ。それ以前のヒトと呼ばれるヒトたち、二足歩行や家族や社会性といわれるが、ゴリラやチンパンジーよりちょっとだけ、ヒトに近いだけかもしれない、なんて思ってしまう。ただこの 100 年、1000 年の進歩、というより変わり方と、縄文の 1 万年の同じような状態を考えると、今がおかしいんだよね。

山極寿一著<家族進化論>

人類は、現在地球上に生存する300種あまりの霊長類の一員である。

その中の、真猿類の変化では。1) 夜行性から昼行性へ 2) 嗅覚から視覚へ 3) 小型から大型化へ 4) 樹上生活から半樹上、地上生活へ。地上に進出した種は。1) 果実ばかりでなく葉、花、芽、樹皮、根、昆虫、小動物などの雑食性に 2) 長距離を移動できる 3) ときには大集団をつくる 4) 四足歩行能力が優れ四肢が長くすばやい 5) 視覚によるコミュニケーションが発達

哺乳類の多くの種がメスだけの集団をつくり、オスは交尾期だけ集団に参加する。霊長類の集団生活はメスだけで集団生活はしない。

霊長類で、昆虫食は小さく、葉を常食とするものは大きい。果実を食べるものは中間の大きさ。哺乳類の代謝量は体重の4分の3乗に比例するので、身体が大きくなるほど体重あたりに必要なエネルギーの量は少なくてすむ。身体の小さい種は栄養価の高い食物をせっせと食べ続けなくてはならない。モグラなどの食虫類がよい例で、12時間以上胃の中に食物を入れないと餓死してしまう。

ここで、昔、驚いたこと、牛はバクテリアを喰っていると読んだことがある、同じ話が出てきた。植物は動物に食べられては困るので、消化阻害物質の毒で被食防衛している。動物はセルロース分解酵素を持つバクテリアを消化器官内に共生させ、その生産物とバクテリアそのものを消化して栄養にしている。

ゴリラは地上の草木を得、小さい遊動域で暮らしていける。葉や草は個体間の競争を高めないから、まとまりの良い群れを形成できる。隣接する群れ同士も遊動域が重なり合う。一方チンパンジーは果実を主とした食生活を送っている。胃腸は比較的小さくてすむ。ただ、果実は得られる時期や場所が限られているから、すばやく広い範囲を動き回らなくてはならない。果実が少なければ単独や小さなグループに分散し、果実が豊富に実ると集まって大きなグループをつくる。

ボノボは当初、チンパンジーと同一視されていたが、別種として分類された、これは最近のことらしい。一見では素人に違いは分からないらしい。チンパンジーよりほっそりしていて手足が長い。とてもおとなしい。チンパンジーは興奮すると、全身の毛を逆立て、二本足で立って腕を振り回して走り回る、木や石を宙にほうり投げたり、板根や木の幹を叩いたり蹴ったりする。まわりで見ている仲間は金切り声を上げて逃げまどう。これに対しボノボは、毛を逆立てないし声もかぼそい。あたりを叩いたり、金切り声も上げない。オスがサトウキビを独占しないで、オスはメスに気兼ねして、むしろメスのほうが優先的にサトウキビをせしめているようだ。餌を前にして興奮が高まったとき、メスたちは抱き合って性器を接触させた。性皮どうしを腰を振ってこすり合わせる、性的に興奮したような声を上げる、これを、「ほかほか」と名付けた。

700万年前にチンパンジーと別れた、人類の祖先が手にした採食方法とはなんだったんだろうか。非常に分散した食物の効率的な採取。強大な肉食動物から身を守る防衛策。直立二足歩行は、エネルギーの効率がよく、外敵への威嚇にもなる、食物が運べる。太陽の照り付ける草原をゆっくりとした速度で長い距離が歩ける。大きな葉でハチの巣や肉を包んで持ち帰る。オスの大きな犬歯が縮小したのは、犬歯によって戦うことをやめたからだろう。

チンパンジーと同じぐらいの脳が大きくなりだすのは、200万年前からだ。動物の骨を石器で割って骨髄を食べていた可能性がある。肉のメニューをとりいれたことが脳の発達に重要なことだった。

丹後の国風土記：丹後国与謝郡（現：与謝郡と宮津市のあたり）に大きな岬がある。昔はその名を、「天の橋立」と呼んでいたが、のちに土地の人が、「くし浜」と呼ぶようになった。その謂れは、国をお生みになったイザナミノミコトが、天に通うための橋をつくった。ところがイザナキが眠っている間に、橋は倒れて横たわってしまった。その出来事を人々は、「くしび」に満ちたことだと思って「くしび浜」と呼ぶようになり、さらに後世のひとが「くし浜」というようになった。

日本三景で有名な天の橋立の伝承で、日本海に延びたこの大きな岬は、もとは神話の時代にイザナキが天に昇るために作った橋でした。ところがイザナキが居眠りをしている間に橋は倒れて今の岬になったということです。「くしび」というのは不思議で神秘的なことを意味する、「靈しぶ」という動詞の名詞系です。同じような形容詞に、「奇し」「奇すし」（くし・くすし）というのもあります。病気を治す不思議な力を持つ薬、薬を使って病気を治す医者（くすし）など、古代では人間の力を超えた靈妙な力への驚きがあったところにあふれていました。飲めば不思議な興奮と快樂をもたらすお酒も、古くは、「くし」と言いました。

国造りを命じられたイザナキとイザナミは、最初の男女の交わりをおこないますが、その交わりは、「天の御柱」（あめのみはしら）をまわってなされます。

古事記の神話の時代には、橋を通して天と地はつながっていた。ところがある時から橋が倒れ、天と地が分離してしまった。天の神の世界と大地に生きる人間がはっきりわかれてしまった。神と人がよりそってともに世界を共有していた時代はすでに過去のものとなってしまった。

漢字は中国語を書き表すための文字です。7世紀ころ、その漢字を日本が受け入れたということは、そのころ、中国文明の導入が新たな国の課題として重要になったのです。中国が作り上げた律令国家という体制を日本にも実現しようとしたとき、お手本は中国とそれをいち早く取り入れた朝鮮諸国です。そうした世界の先進文明を取り入れようとしたときに、古くからさまざまに伝えられた神話があらためて注目されました。古いヤマトの神話が注目されたのは、そこに日本人のアイデンティティを求めたからでしょう。そこで編纂されたのが、「古事記」や「日本書紀」の神話です。ほぼ同じころに、「風土記」の編集も行われました。

道がある。どこにでも行く道、いける道。

天に通じる、ならば地にも通じる。

男と女が交わるという、ふつうのことから話ははずんで、

人と人、人と人でないもの、道が通じて、交信ができる。

男と女が交わり、人のあかんぼが生まれ、人でないもののあかんぼが生まれる。

人でないものと、簡単にいうけれど、そりゃあ、なにものだ。

山だ、川だ、地面だ、神さんだ、お化けだ、妖怪だ、靈魂だ。

山が、お化けと、けんかして、仲直りして、交わって、そりゃあ、おまえを生む。

おまえはまた、地面に突っ立って、天を見て、地を見て、生きざまを考える。

生きざまとはなんだ、何のために生きる、なぜ苦しむ、なぜ泣く。

おまえは、棒つきれを杖にして、地面を歩く。

地面が急になくなって、宙を飛ぶ、おまえは歩いているつもりなんだよな。

考えてみれば、地面も、宙も、おんなじものなんだな。

◎今日の山は若狭駒ヶ岳、たいそうな名前だけれど、780Mの低い山、何度も登っている山、木地山から池をめざして、そのちょっと先にある多少背の高いところだ。それこそ何度も来ているが、今回はいつもと違い、福井県側、熊川から、河内川（こうちがわ）ダムを超えたあたりから登る。朽木を過ぎたあたり、道路に雪が出始め、ダムに近づくころには、アスファルトが見えないぐらいに雪があった。

◎車はダム湖のまわりを少し回ったところで止めた。止めたところには雪が10センチぐらい積もっている。「運動靴では濡れるなあ 着替えるときに濡れるなあ」ぼやきつつ、登山靴にはき替え、スパッツを、毛糸の帽子を、厚い手袋をつけた。寒くない、たまたま昨日、今季最大の寒波で日本海側は雪が降ったが、今日は、だんだん温暖化現象の冬に戻りつつあるのかな。

◎9時出発 30分ぐらい登ってきた。おそらくこの山道は階段があり、よく手入れされた穏やかな道と思われるが、30、40センチの新雪がふわり地面をおおっているの、フワリが乗った階段かもという姿が見えるだけ。

◎「あれれ どっちかな」道がおだやかなだけに、目印の赤い印が無い、「まっすぐか 左か」迷いつつ歩いていくと、階段らしいフワリがある。「あっちは けものみちかな けもの道のほうが 道らしいかな」

◎1時間ぐらい登ってきた。天気はちらっと晴れるが、あとはどんより曇り空。まわりの山々はぼっとして霞がかかったような中、まだらに雪が乗った北陸の山々が見える。先日登った湖北武奈ヶ嶽も大きく見える。

◎全山、まっしろ、雪山満喫、ひとつこー人いない。シカの、ウサギの足跡が無数に。先ほどシカの白毛の尻を見た、慌てて駆け上っていった。

◎三叉路がある。明神谷と白石神社、ます池、前方が目的の駒なんだがと前を見やると小屋がある、あれはなんだろう。なんと大きな施設、市民のいこい村だったのか、今は廃村になっているが、桜の木が大きく苔むし、雪に隠れて地面の様子はわからないが、ほんわか古びた公園が展開していく。

◎木地山から今日の目的地の駒ヶ岳までは何度も登っていた。「森林公園は こちら」の標識を何度か見たが、「山の中で 公園とは なんだろう」ぐらいに思っていた。なんとここは大きな公園、小浜市の公園なのかな、電気も通っていた、キャンプ場があった、かつて夏場は賑やかであったろうと想像される、今は、すべてが終わっているようだ。雪のない季節は車でここまで登って来られるらしい。

◎「たぶん あれが てっぺん 今日の目的地」雪のかぶったこんもりが向こうに見える。「あの距離か あと2本ぐらいは かかるかな」「えいさあ こらさあ」ラッセルである。斜面の上り、靴が雪に食い込む、今日の雪は歩きやすい、もう一度、「えいさあ こらさあ」ラッセルである。

◎この2.3日の天気、今季最高の寒気団、そのあとは徐々に暖かくなって、なんてことがそううまくは運ばず、昨日の夜は、「明日の午前中の降水確率が30%」と出ていたが、今朝になって、「降水確率はゼロ」になっていた。12時近く、「おお 晴れてきた」と感嘆の声。山は晴れがいい、青空に白い雲、その裏っかわが黒い雲、「いい雰囲気だねえ お日さんが出てきた 暖かい」小鳥の団体が右から左に流れていく。

◎12:30 何度も来たことがある三叉路にやってきた。「暖かいね さあ 飯を食おう 頂上は すぐそこ 飯のあとだ」同道の相澤・上西のお二人からうまいおかずをいただき、ご飯をほおばり、カップヌードルをすすった。ここの尾根道は樹々がまっすぐ立っている ひよろり背が高い、風がきつくないのかな。

◎腹が満腹、空荷で頂上へ。「あのダムは どの ダムかな」いつも思っていたが、今日はあそこから登ってきたのだ。

◎だいぶ下のほうに降りてきた。陽が照ってきた、樹々の影が、オレの影が、真っ白い新雪に映る。上のほうは40.50センチの積雪かな、それでも歩きやすい、ワカンを履くことはなかった、登山靴のまま、ずぼあしで、急斜面の上り下りも苦もなく歩けた。

◎まもなく車のところだ。帰り時間になると雪も緩み始め、つるりと滑る。最後のふんばり、気を付けなければ、下に小さい谷の水が流れ、林道まで下りてきた。靴を履き替え、下着のシャツを着替え、無事を感謝して車に乗った。5時前に出発した。ダムの事務所の明かりがついていたので、ダムカードをいただいた。

この世界に初めて天と地が現れたときに、高天原に最初に成り生まれ出た神は、「アメノミナカヌシ」次に、「タカミムスヒ」「カミムスヒ」この三柱の神々がまず姿を現し、そしてひとたびその姿を消した。

最初の最初に、三人の神が出現して消えてしまう。「不思議な話　なんで　三人が必要なのかな・・・」あとの二人には「ムスヒ」という音が付く。苔むす、草むす、生命が生まれ広がることだそうです。ムスが虫に、虫も数えきれない群れとして地上に現れます。むすこ、むすめ、の「むす」も同じ使われ方だと、本居宣長の古事記伝に述べられています。

つぎに、この国がまだ生まれたばかりで、脂のように、また海月（くらげ）のように漂っていたときに、葦の芽のように勢いよく萌えあがるものがあった。その盛んな動きの中から神が生まれた。その名をウマシアシカビヒコチと言った。「なんで　葦　葦つ原の中つ国　なんだろう」とこれまた不思議。

国が、大地が、浮遊状態で、脂が浮いたような姿、クラゲのぷよぷよした感触、大地が固まるまでの状態を表している。アシカビとは、葦の芽のことです。さいしょの最初の大地で、植物の葦が出てくる不思議さ。世界は、天上界「高天原」地上界「芦原の中つ国」死の世界「黄泉の国」の三つがあった。

天地開闢（かいびやく）　本居宣長は、「陰陽別れず、混沌として」これは中国思想から借りたもの。中国では「全ては卵の中身のようにドロドロで、混沌としていた」

ギリシャ神話：まづ最初にカオスが生じた。カオスとは混沌のこと。現代の宇宙物理学ならビッグバンというところかなと、ネット先生。

さてつぎに、広い大地（ガイア）、オリンポスの頂に、八百万の神々がいた。頂というのは天上世界の比喩。余談ですが、「ヴィーナス」と「アフロディテ」とは？ギリシャ神話では愛と美の女神は、アフロディテ。ヴィーナスはローマ神話の神。同じ愛と美の女神だ。ローマ文明はギリシャ神話ギリシャ文化をとりいれている。

北欧神話：世界には当初、燃え上がる氷塊と絡みつく炎しかなかった。やがて氷塊が解けた雪の中から、巨人「ユミル」が生まれる。ユミルは別の氷から同じように生まれたメス牛の乳を飲んで大きく育ちます。

ユダヤ・キリスト・イスラムなど多くの人に信仰されているアブラハムの宗教にとって聖書は重要な經典です。様々な神話的物語が書かれている。ヒトは神が造った、という神話なのか。

スラウェシ島（セレベス）：天と地の間は近い。ヒトは創造神が天空から、縄に結んで垂らしてくれる贈り物によって命をつないでいた。創造神は石をおろした。「この石をどうしたらいいのか」神はバナナを下した。ヒトは喜んで食べた。神は、「お前たちはバナナを選んだ　お前たちの　生命は　バナナのようになるだろう」ヒトの生命は、バナナ（子）が生まれて、バナナの木（親）は枯れていく。石を選べば、ヒトの生命は永遠だったのに。

最初の最初というもの、1000年2000年前の人たちが神であり霊であり、自然現象やまわりの景色、物事を当たり前の日常と思わずに、「なにがどうなって　我々がいるのだ」「これから　世界は　どうなるのだ」ということを考えはじめた。みんなが集まって、「ああでもない　こうでもない」と一杯機嫌やら、悲嘆に暮れて争っているのやら、文字がないので今の時代まで残っていないが、それこそ世界中にいろいろな空想、奇想天外な考え方が出ては消え、想っては無くなり、それが、創生期の神話なのかな。

ひんがしの のにかげろひの たつみえて かえりみすれば つきかたぶきぬ <江戸時代：賀茂真淵訳>

あずまのの けぶりのたてる ところみて かえりみすれば 月かたぶきぬ <鎌倉時代：仙覚>

万葉集が編纂された奈良時代は、かな文字ができる前なので、万葉集は元来漢字だけでつづる万葉仮名で書かれていた。一口に万葉仮名といっても、万葉集の初期には漢字の意味を当てはめた漢文調になっていた。それが徐々に漢字の意味を捨て発音だけを使うようになった。最後には一音一字で意味はほぼ無視の万葉仮名が完成する。それが平仮名になるのは、平安時代の古今和歌集を待たなければならない。

平安時代に書写された柿本人麻呂の歌は、詠みが空白になっていた。奈良時代のこの歌が、平安時代ですでに、どのように詠んでいたのか、どう発音されていたのか、わからなくなっていたのだ。

万葉仮名の例。山→他麻。春→波流。あ→安・阿・足・・・。く→久・苦・来・口・九・・・。

石川九揚先生：漢字は中国語をあらわす文字であった。もともと日本列島では、「やまとことば」が使われていた。中国から流入した文字・言語・文化の影響を受け、当時の日本語が、字として書き記されることによりはじめて、今の日本語が形成されていった。やまとことばと、のちの日本語とかなり異なるものであった。

古事記の書き出し。これを本居宣長が、下記のように読み下した、翻訳（あえてこの言葉を使う）した。

下記の翻訳：この世界に初めて天と地が現れたときに、高天原に最初に成り生まれ出た神は、「アメノミナカヌシ」次に、「タカミムスヒ」「カミムスヒ」この三柱の神々がまず姿を現し、そしてひとたびその姿を消した。

天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神、次、高御産巢日神、次、神産巢日神、此三柱神者、並独神成座而、隱身也。

天地（あめつち）の初めの時、高天の原になりませる神の名（みな）は、天之御中主（あめにみなかぬし）の神、次に高御産巢日（たかひむすび）の神、次に神産巢日（かんむすび）の神。

此の三柱の神は、みな独り（ひとり）神成りまして、身を隠したまひき。

本居宣長の有名な神の話。

さてすべての迦微（かみ：神）とは、古の御典等（みふみども）に見えたる天地もろもろの神たちを始めて、其れを祀れる社に坐す御霊をも申し、また人はさらに云わず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其のほか何にまれ、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳（こと）のありて、可畏（かしこ）き物を迦微とは云うなり。

そもそも迦微はかくのごとく種々（くさぐさ）にて、貴きもあり賤しきもあり、強きもあり弱きもあり、善きもあり悪しきもありて、心も行（しわざ）もそのさまさまに随ひて、とりどりにしあれば、大かた一むきに定めては論（い）ひがたき物になむありける。

そもそも中国での漢字の始まりは、BC14頃の甲骨文字だそう。甲骨文字；卜占であり吉凶を占った。甲骨が発見されたのは最近のこと、日清戦争のころ、100年ちょっと前、亀や牛の骨に掘った形象文字。画像で見ると、ギリシャ文字のような絵も見える、形象そのものである。亀甲文字の、魚・亀・羊らの字を見ると、まさに絵である。今の標準的な漢字は60~100ころ中国で完成。日本には4.50に伝わった。